21　東都時名画帖　増山雪斎ほか　二帖

絹本着色　江戸時代、文化年間（一八〇四～一八）
総各三三・六×二五・八

乾坤の二帖からなる画帖で、当時、江戸に在住して活躍した、増山雪斎（一七五四～一八一九）、谷文晁（一七六三～一八四一）、渡辺崋山（一七九三～一八四一）ら二十五名余の画家の作品が収められる。画題は、人物、山水、花鳥に基づくもので、それぞれの画師が得意なものを選んで描いているようである。各帖には、最初に乾は阿部正精（一七七四～一八二六）、坤は増山雪斎による四字の賛がある。阿部正精は福山藩主で、港の築造や問所を設置する等、藩政に力を注いだ他、正精自身が学問や書画に優れた才能を発揮した。絵画は南蘋の画風を学んだという。また増山雪斎は伊勢長島藩主で、文人大名として知られる。木村蒹葭堂との交流は深く、大田南畝のような文学者の他、十時梅厓、春木南湖、宋紫石らの画師らとも親しく、自らも作品を多く遺している。彼らの賛に続いて、乾の帖には両面に十八名による27図、坤には同じく二十名による35図が収められる。最も多いのは片桐桐隠（一七六三～一八二四）の5図、谷文晁と谷文一（一七八六～一八一八）が3図で、一人2図を平均とし、渡辺崋山ら数人は1図のみである。画師は谷文晁とその門人を中心としており、渡邊玄対（一七四九～一八二二）、鏑木雲潭（一七八一～一八五二）、金子金陵（？～一八一七）、春木南湖（一七五八～一八三九）らの他、山本梅逸（一七八九～一八五七）、五十嵐竹沙（一七七三～一八四四頃）や南蘋派の山崎董烈（一七八五～一八三七）、大西圭斎（一七七二～一八二九）、宋紫岡（一七八〇～一八五〇）らが含まれる。年記のあるものは文化十年を中心にその前後が多く、最も早いものが広瀬臺山（一七五一～一八一三）の文化六年、最も遅いものが文化十四年と見られ、これらの絵がほぼこの時期に制作されたと判断出来る。

今回の展覧会では、この中の花鳥画だけを取り上げたが、増山雪斎や谷文晁の門人たち、南蘋派の画師たち等、十八世紀に活躍した画師や本草学者らの存在が、その後の花鳥画にも大きく影響を及ぼしていることが分かる。

〈参考〉渡辺崋山

〈参考〉谷文晁（文化9年）

増山雪斎「野薔薇に翡翠図」

増山雪斎「木瓜に雀図」

山崎董烈「鶉図」

山崎董烈「立葵に蜻蛉図」

金子金陵「梅に鶯図」

金子金陵「粟に鶉図」

岩尾雪峰か「百合に蜂図」

井上水斎「木槿に蜻蛉図」

大西圭斎「孔雀図」

大西圭斎「百合に蜂蝸牛図」

河田蟠渓「木瓜に文鳥図」

河田蟠渓「百合撫子に雀図」

鏑木雲潭「蒲公英に蝶図」

清水曲河「牡丹図」

清水曲河「菊花図」

岡田閑林「蓮に翡翠図」

岡田閑林「木蓮に小禽図」

宋紫岡「孔雀雌雄図」

喜多武清「菱にメダカ図」

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花鳥―愛でる心、彩る技〈若冲を中心に〉
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 40

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十八年三月二十五日発行

©2006, The Museum of the Imperial Collections